



図2. 文献検索により得られた、1995年から2004年に公表された動物由来感染症関連症例報告の年別件数及び症例数

厚生科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）  
「国内の患者症例報告に基づく動物由来感染症の実態把握及び  
今後の患者症例報告収集と検索システムの開発に関する研究」  
分担研究報告書

症例報告による

国内の患者症例報告に基づく動物由来感染症の実態把握に関する研究：

II. 報告された症例の分析

主任研究者 高山直秀 東京都立駒込病院小児科部長

研究要旨：国内で発表された症例報告から日本における動物由来感染症の実態を知る目的で文献データベースを利用して、1995年1月から2004年11月の間に公表された動物由来感染症の症例報告を検索した。39疾患をキーワードとして検索し、検出された文献から総論、治療法、検査法などに関する文献、国内の英文誌に掲載された外国で発生した外国人の症例報告、外国で感染した日本人輸入例の症例報告を除外した結果493件が抽出された。上記期間に1件以上の症例報告が掲載された疾患は24疾患であり、疾患別ではバルトネラ菌症が64件、症例数95例で最も多く、つつが虫病が41件、57症例、エルシニア症が38件、58例、糞線虫症が35件、38症例と続いた。検査法、病原体、治療法などはこれまで成書に記載された内容と大差のない結果であったが、患者の年齢分布、男女比、感染機会、発生地などに関しては、猫ひっかき病、パスツレラ症、トキソプラズマ症では女性患者が多く、E型肝炎、レプトスピラ症では男性患者が圧倒的に多いこと、猫ひっかき病では従来言われているより中高年の患者が多いこと、猫ひっかき病の発生が北海道、東北、北陸地方に少ないこと、先天性トキソプラズマ症患者の中に母親が妊娠中に獣肉を生食したことが感染源と考えられる例があったことなど、新しい情報を得ることができた。文献検索により抽出した症例報告から動物由来感染症の発生動向を知るという手法には、届出患者数が多い疾患では1%前後、届出患者数が少ない疾患でも30%程度しか把握できないという欠陥はあるが、通常の発生動向調査では得られない感染経路、診断法などに関する情報も入手することが可能であり、動物由来感染症の実態を明らかにするために有用な方法であると言える。また、得られた情報を診療現場に還元すれば動物由来感染症診療上の一助となる。

A. 研究目的

わが国において動物由来感染症は長く注目されることがなかったが、伝染病予防法に代わり、1999年に「感染症の予防及

び感染症の患者に対する医療に関する法律」（感染症法）が施行されたことに伴い、一部の動物由来感染症が発生動向調査の対象疾患に指定された。このことにより、医

療及び獣医療関係者の間に動物由来感染症の重要性が認識されるようになった。感染症法により動物由来感染症の届出制度は整備されたとはいえ、届出はあくまでも医師が動物由来感染症を正しく診断できることが前提となっている。卒前及び卒後教育において動物由来感染症について学ぶ機会をほとんどもたなかった診療現場の医師にとって動物由来感染症の症例を正しく診断することにはかなりの困難がある。さらに動物由来感染症の診断に必要な微生物学的、血清学的、遺伝子的検査が実施できる機関が限定され、検査可能研究施設に関する情報も限られていることが問題を一層困難にしている。こうした事態を打開するために、(1)過去に公表された人獣共通感染症関連の症例報告を可能なかぎり収集し、(2)収集した症例を疾患ごとに医療者側の見地から整理して、症例集を作成し、(3)作成した症例集に記載された実際の症例に基づき個々の疾患の実態を記述し、(4)症例集および個々の疾患の記述を臨床現場の医師および獣医師が利用しやすい形で公表する(CD-ROMの配布、ホームページへの掲載を含む)。また、(5)ヒトの症状、動物の症状などを鍵(キーワード)にした疾患検索ないし診断システムの開発を進め、日常診療の中で動物由来感染症の診断を容易にすることを目標とした。

## B. 研究方法

動物由来感染症症例報告の収集は過去20年間を最終目標としたが、初年度は1998年1月から2004年12月までの症例報告文献をデータベースを利用して収集し、2年度に1995年から1997年までの文献を追加収集した。

データベースとしては、独立行政法人科学技術振興機構(旧日本科学技術情報センター)所蔵のものをを用い、下記の39の疾

患名(日本語及び英語)をキーワードとして検索した。

検索対象感染症として、Bウイルス感染症、リンパ球性脈絡髄膜炎、狂犬病、狂犬病関連リッサウイルス感染症、日本脳炎、サル痘、E型肝炎、腎症候性出血熱、Q熱、オウム病、ブルセラ症、ライム病、鼠咬症、リステリア症、炭疽、ペスト、つつが虫病、パスツレラ症、類丹毒、仮性結核、発疹チフス、野兎病、猫ひっかき病(バルトネラ菌症)、エルシニア症、秋やみ、発疹熱、紅斑熱、回帰熱、クリプトコッカス症、真菌症(糸状菌症)、クリプトスポリジウム症、ジアルジア症、トリパノソーマ症、トキソプラズマ症、エキノコックス症、糞線虫症、トキソカラ症、アライグマ回虫症、肝蛭を選択した。

## C. 研究結果

### 1. 一次調査

データベースに未収録の報告もあったため、実際の検索時期は1995年1月から2004年11月までとなった。上記の疾患をキーワードとして検索した結果、合計1,107件の文献が検出された。

### 2. 二次調査

一次調査で検出した文献の抄録を検討して、総論、治療法、検査法など症例報告以外の文献を削除した。また、日本の学会誌に掲載された外国人の症例報告は除外し、日本人症例であっても外国で感染したと考えられる、いわゆる輸入例も集計対象外とした。その結果、該当文献数は651件となった。

### 3. 三次調査

二次調査で国内発生動物由来感染症症例と判断された報告のコピーを入手して、さらに検討した。抄録では判断できなかった

輸入例，その他後天性，医原性免疫抑制状態にある患者の合併症として発生した事例などを除外した。また，2次集計では，秋やみをレプトスピラ症として，仮性結核をエルシニア症として集計した。その結果，上記期間内に1例以上の症例が報告された疾患は24疾患，文献数は合計493件となった。

文献件数の多少を感染症ごとにみると，猫ひっかき病（バルトネラ菌症）が64件で全体の12.3%を占めた。次いでつつが虫病が41件（8.3%）エルシニア症が38件（7.7%），糞線虫症が35件（7.1%），リステリア症が34件（6.9%），トキソプラズマ症が32件（6.5%），トキソカラ症が31件（6.3%）パスツレラ症30件（6.1%）と続いた（表1）。

年別に掲載された文献数を比較すると2003年に74件と最も多い症例報告がみられ，2002年に59件，1997年と2001年には54件の報告がみられた（図1）。

文献から，報告されている症例数を調査したところ，24種の感染症全体で報告症例数は697例であった（表2）。疾患別では猫ひっかき病（バルトネラ菌症）が95例で最も多く，全体の13.6%を占めた。エルシニア症が58例（8.3%），つつが虫病が57例（8.2%），パスツレラ症が45例（6.5%），トキソカラ症が42例（6.0%），リステリア症が40例（5.7%）と続いた（表1）。

報告された症例数を年代別にみると，文献数がもっとも多かった2003年が128症例ともっとも多く，2002年が85症例，1996年が73症例，2001年が70症例であった（図1）。

#### 4. 疾患ごとの調査結果

##### 4-1. 猫ひっかき病（バルトネラ菌症）

###### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004年までに64件の文献が検索され，合計95例の症例が記載されていた。年別に公表された文献数をみると，2003年が13件で最も多く，1999年が11件，1997，2001，2002年が各8例であった。1報告された症例数は，最多の2002年が24例で，2003年が16例，1999年と2001年に12症例の報告があった。1995～1998年の4年間に検索された文献は27件，症例が21例であったが，2001～2004年には文献33件と58症例が検索され，近年報告数が増加している印象があった（図2）。

###### イ) 患者の男女別年齢分布

報告された症例の年齢分布をみると，幼児から中高年者まで幅広く分布していたが，20歳代以下に患者が比較的多く，15歳未満の小児患者は41%（39/95）であった。最年少の患者は1歳児で，最高齢者は81歳であった。男女比は29:66で女性患者が男性患者の約2倍であった（図3）。

###### ロ) 主訴及び初診時の所見

患者の主訴では，皮下腫瘍や腫脹，発熱，リンパ節腫脹がそれぞれ40例，30例，19例と多かったが，視力障害が7例，顔面神経麻痺，意識障害も1例ずつみられた。初診時の主要症状では，皮下腫瘍・腫脹，リンパ節腫脹，発熱がそれぞれ37例，24例，16例であったが，視力障害も12例あった。症状として，発熱のみの患者が8例，視力障害のみの患者が7例あった（表3）。

###### ハ) 診断に要した主な検査

実施された検査法の中では，抗体検査が最も多く，51例であった。次いで生検ないし切除が28例，CTやMRI検査が23例，超音波検査が5例などであった（表4）。

###### ニ) 病原体

病原体に関する記載があった62例のうち，4例では病原体が確定できなかったが，残る58例では *Bartonella henselae* であった（表4）。

#### か) 治療及び予後

治療では、抗菌薬投与のみにて治療した例が 27 例、抗菌薬にステロイド剤を併用した例が 18 例、抗菌薬を投与したが無効と判断して中止した例が 6 例、外科的処置によった例が 10 例みられた (表 4)。

#### き) 動物飼育歴ないし接触歴

動物飼育歴や接触歴に関する記載があった 86 例のうち、ネコの飼育歴があった例が 61 例、ネコとの接触歴があった例が 20 例、イヌとの接触歴があった例が 1 例、不明が 2 例であった。一方、ネコとの接触歴を否定した患者は 2 例であった (表 4)。

#### く) 発生上の特徴

患者報告が多かった地域としては、東京都が 12 例、大阪府、福岡県が各 9 例、高知県が 7 例であったが、地方別にみると、沖縄県を除く九州地方が 24 例ともっとも多く、関東地方 19 例、中国地方、四国地方が各 13 例と続いた。北海道、北陸地方からの報告はなく、東北地方からも 2 件に過ぎず、寒冷ないし多雪地方からの報告が少なかった (表 3)。ネコでのバルトネラ菌感染が北より南で多いことが知られているが、ヒトでも同様の傾向があることが判明した。

### 4-2. つつが虫病

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004 年までに 41 件の文献が検索され、文献上合計 57 例の症例が記載されていた。年別では、1997 年に最多の 10 件の文献がみられ、2001 年に 7 件、2002 年に 6 件と続いたが、2004 年には報告がなかった。症例数では、1997 年が 14 例で最も多く報告され、2003 年に 10 例、2001 年に 8 例が記載されていた (図 4)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、40 歳未満の患者数は少なく、中高年の患者が多く報告され、

70 歳以上が 18 例と最多であった。最年少患者は 4 歳、最高齢は 84 歳であった。男女比は 32:25 で、やや男性患者が多かった (図 5)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴をみると、発熱を主訴とした例が 57 例中 52 例、発疹・紅斑が 26 例、全身倦怠感が 11 例、頭痛が 8 例、リンパ節腫脹が 5 例であった (表 5)。初診時の主な症状では紅斑・発疹が 45 例、発熱が 43 例、リンパ節腫脹が 26 例であり、DIC を来した例、血小板減少例、呼吸困難・呼吸不全がみられた例がそれぞれ 8、6、4 例あった (表 5)。

#### エ) 診断に要した主な検査

IgG 抗体や IgM 抗体測定が 48 例で、CF 抗体測定が 3 例で、ワイル・フェリックス反応が 13 例で実施され、12 例では PCR 法も行われていた。骨髄穿刺を受けた例が 3 例、皮膚生検、リンパ節生検を受けた例が各 1 例みられた (表 5)。

#### オ) 病原体

記載がなかった 1 例を除いて病原体は *Orientia tsutsugamushi* と記載されていたが、血清型まで確定できた例は 17 例であった。血清型の内訳は、Guilliam 型が 9 例、Karp 型が 6 例、Fujita 型と Kato 型が各 1 例であった (表 6)。

#### カ) 治療及び予後

全例で抗菌薬が投与されており、内訳はミノサイクリンが 55 例、ドキシサイクリンが 2 例であった。ほかに、プレドニゾン投与を受けた例やステロイドパルス療法を受けた例が各 1 例いた (表 6)。55 例は回復したが、2 例は救命できなかった (表 6)。

#### キ) 感染源と感染機会

感染源について記載があった 53 例中 51 例でマダニが感染源と記されていたが、刺し口が発見できなかった例が 2 例あった。

感染機会としては、山中、河川敷・土手、山麓、藪での活動がそれぞれ12例、5例、4例、3例あり、農作業が9例、山菜採りが3例あった。また、ゴルフ場や陸上競技場で感染したと考えられた例が各1例あった(表7)。

#### ク) 発生上の特徴

患者発生の報告は、広島県から10例、神奈川県から5例、千葉県から4例、青森県、岩手県から各3例なされていた。ほかに2例の報告が9県から、1例の報告が11県からなされていたが、大阪府や島嶼部を除く東京都からは患者発生の報告はなかった(表7)。

### 4-3. エルシニア症

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004年までに38件の文献が公表され、これらに合計58例の症例が記載されていた。文献数を年別にみると1996年が7件で最多であり、1995と1997年が6件でこれに次いだ。1995～1998年に公刊された文献数は合計23件であったが、2001～2004年では9件であり、近年発表文献数が減少する傾向がみられた。一方、報告症例数では、2000年が10症例で最も多く、1998年が9例、1995、1996、1997年が各8例と続いた(図6)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

年齢別患者数では、15歳未満の小児患者が約70%(41/58)を占めた。15歳以上では、30歳代の8例を除いて、20、40、50、60歳代、70歳以上の患者数は1～3例であった(図5)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では、発熱が41例で最も多く、右下腹部痛が14例、腹痛が13例であった。腹痛に下痢、嘔吐などを加えた腹部症状を主訴として受診した例は合計41例であった(表8)。初診時の主な症状としては、

右下腹部圧痛が25例と最多で、次いで発熱が11例であり、紅斑が6例、下痢が5例と続いた(表8)。

#### エ) 診断に要した主な検査

便(21例)、膿(7例)、穿刺液(1例)、リンパ節(5例)、生検組織(5例)、井戸水(1例)から細菌分離がなされていた。また、血清抗体の上昇も18例で確認されていた(表9)。症状により、CT検査、超音波検査、生検などが実施されていた。

#### カ) 病原体

*Yersinia enterocolitica* が32例から、*Y. pseudotuberculosis* が24例から分離された。1例では *Y. enterocolitica* と *Y. pseudotuberculosis* がともに分離された。3例では菌分離が陰性であった(表9)。

#### キ) 治療及び予後

予後に関する記載があった50例中、47例は軽快ないし改善していた。著変なし、経過観察中が各1例あった。また、肝障害、腎不全を来した1症例は不幸の転帰をとった(表9)。

#### ク) 感染機会

感染機会や感染経路に関しては、井戸水の飲用が4例で、湧き水の飲用が1例で記載されていたが、それ以外の症例では記載がみられなかった。

#### ケ) 発生上の特徴

患者報告地は、岡山県が8例、青森県が7例、東京都が6例、北海道、山形県が各5例、沖縄県が4例あったほか、3例報告地が2県、2例報告地が3県、1例報告地が11県あり、特定の地域に集積する傾向はみられなかった(表8)。

### 4-4. 糞線虫症

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004年までに35件の文献が公表され、合計38例の症例が記載されていた。年別にみると、論文数では2003年が6件

と最多であったが、症例数では 2000 年が 7 例で最も多かった (図 8)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では 30 歳未満の患者は報告がなく、50 歳代が 13 例、70 歳以上が 12 例と中高年層に患者が多かった。男女比は 19 : 19 で同数であった (図 9)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では、浮腫が 7 例、下痢、体重減少、腹部膨満感、呼吸困難が各 6 例で比較的多かったが、腹痛、咳嗽、皮疹、掻痒感、嚥下障害、意識障害など様々なものがみられた。初診時の主な症状でも、浮腫、腹部膨満、腹部圧痛がそれぞれ 6、5、4 例で比較的多かったが、その他様々な症状がみられた (表 10)。

#### エ) 診断に要した主な検査

診断のための検査では、40 例中 38 例で糞線虫ないし幼虫の確認がなされており、抗体検査が 1 例、記載なしが 1 例であった。虫体が便から検出できた例は 18 例、腸生検で虫体を証明した例が 8 例あり、喀痰、BAL からの検出が各 3 例、皮膚生検での証明が 2 例、胸水、十二指腸液で虫体を認めた例が各 1 例であった (表 11)。

#### オ) 治療及び予後

39 例で治療薬の記載がみられた。投与された薬剤としては、チアベンダゾールが 24 例と最も多く、ミンデゾール、アイバメクチンが各 5 例、イベルメクチン、メベンダゾールが各 2 例、アルベンダゾールが 1 例であった (表 11)。予後が記された 38 例中、28 例は改善ないし軽快したが、10 例は死亡した (表 11)。

#### カ) 発生上の特徴

報告地は大阪府が 8 例で最も多く、沖縄県、長崎県がそれぞれ 6 例、5 例であった。東京都など関東地域からも患者の報告があった。大阪府からの報告例のうち少なくとも 5 例は沖縄県や鹿児島県の出身者であっ

た。関東地域からの報告例の中にも沖縄県や鹿児島県などの出身者がみられた (表 10)。

### 4-5. リステリア症

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995 ~ 2004 年の間に 34 件の文献が検索され、合計 40 例の症例が記されていた。毎年文献が公表されていたが、1996 年が 7 件、1995 と 1997 年が 4 件で、他は 2 ~ 3 件であった。1995 ~ 1999 年の間に 21 件、2000 ~ 2004 年には 13 件が発表されており、近年発表件数が減少している傾向がみられた (図 10)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、患者発生が乳幼児群と成人群に分かれ、0 歳児患者が 15 例と最多で、70 歳以上、60 歳代がそれぞれ 6 例、5 例であった。男女比は 17 : 23 で大きな差はなかった (図 12)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では、発熱が 26 例と最多で、意識障害、無呼吸・呼吸障害、頭痛、チアノーゼが 11 例、8 例、8 例、7 例と続いた。初診時の主要症状でも、発熱が 26 例、項部硬直が 13 例、意識障害が 11 例、呼吸障害、チアノーゼが各 5 例であった (表 12)。

#### エ) 診断に要した主な検査

全例で細菌培養がなされ、必要に応じて CT、MRI 検査が実施されていた。

#### オ) 病原体

40 例中 38 例で *Listeria monocytogenes* が分離された。血清型が判明した菌株では、4b 型が 12 株と最も多く、1/2a 型が 4 株、1/2b、1、6 型が各 1 株であった (表 13)。

#### カ) 治療及び予後

治療薬の記載がなかった 3 例を除いた 37 例で抗菌薬が投与されていた。抗菌薬の内容は、ABPC と他剤併用が 23 例、併用から ABPC 単剤に変更した例が 8 例、

ABPC 以外の抗菌薬が 8 例であった。他に 7 例で呼吸管理が、3 例で交換輸血が実施され、ガンマグロブリンが 3 例で投与されていた (表 12)。予後は、34 例が後遺症なく回復したが、4 例は死亡した。1 例は水頭症を残して回復した。残る 1 例の詳細は不明であった (表 13)。

#### わ) 感染経路

半数近い 16 例では感染経路が不明であった。9 例では胎内感染が考えられ、産道感染が 1 例、院内感染が 2 例あった。また、院内感染が疑われた例が 2 例、経口感染が疑われた例が 10 例あった (表 13)。

#### き) 発生上の特徴

患者報告地は、東京都が 7 例、大阪府、愛知県がそれぞれ 5 例、4 例であったが、2 例報告地が 8 県、1 例報告地が 6 県あり、特定の地域への集積傾向はなかった。

### 4-6. トキソプラズマ症

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

調査対象期間内に 32 件の文献が検索され、合計 38 例の症例が記されていた。年別では、2002 年を除く 9 年間には 1 件以上の文献が公表されていたが、1995～1999 年の間に 24 件、2000～2004 年には 8 件の発表で近年発表件数が減少している傾向がみられた (図 12)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、0 歳児の患者数が 9 例と最も多く、10 歳代が 8 例、20 歳代が 8 例と続いたが、1～9 歳の患者は少なかった。男女比は 14:24 で女性に多かった (図 13)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は水頭症、発育障害など先天性感染によるもの、腫瘍・腫脹や抗体陽転など後天性感染によるもの、視力低下など先天性、後天性いずれにも生じるものに分かれたが、数的には視力低下などが 15 例で最も

多かった (図 14)。主要症状でも、主訴と同様に 3 群に分かれたが、眼科的異常が 21 件と最多で、リンパ節腫脹が 11 件でこれに次いだ (図 15)。主な症状を年齢別にみると、水頭症は 0 歳の患者のみに、連覇説腫脹は 10 歳代から 60 歳以上までに、眼科的異常は 0 歳児だけでなく 10 歳以上の患者にもみられた (図 16)。

#### エ) 診断に要した主な検査

主な検査法としては、血中抗体の測定 (IgG, IgM 抗体を含む) が 37 例で最も多く、眼底検査、CT 検査、PCR がそれぞれ 21 例、12 例、8 例と続いた。一方で、主要症状がリンパ節腫脹であった 11 例中 9 例で悪性腫瘍との鑑別などのために、リンパ節生検・摘出例がなされていた (表 14)。

#### オ) 治療及び予後

記載があった 37 例中、投薬を受けなかった例が 5 例、交換輸血が 1 例あったが、それ以外の 32 例は何らかの薬物治療を受けていた。投与された薬剤としては、アセチルスピラマイシンが 21 例 (単独投与 10 例、併用 11 例)、ピリメサミンと他剤併用が 6 例であった。他にクラリスロマイシン、クリンダマイシン、ST 合剤、抗癌薬が各 1 例であった (表 14)。予後は後遺症なく回復した 11 例や改善をみた 13 例から死亡した 4 例まで様々であった (表 14)。

#### カ) 感染経路及び感染機会

胎内感染を受けたと考えられる症例が 14 例、後天性感染と判断される例が 24 例あった。後天性感染者で判明した感染機会としては、牛肝生食が 2 例、馬肉生食、ヤギ肉生食が各 1 例あり、イヌ、ネコ飼育がそれぞれ 4 例、3 例であった。また、胎内感染を受けた小児患者の母親のうち、妊娠中に生肉食歴がある者が 2 名みられた (表 15)。

#### キ) 発生上の特徴

患者の報告地は東京都が 6 例、福岡県が



4例であったが、栃木県、神奈川県、千葉県が各3例、長野県、鳥取県、山口県、宮城県が各2例、ほかに1例の報告が11県からあり、特定の地域に集積する傾向はなかった(表15)。

#### 4-7. トキソカラ症

##### ア) 年別文献数及び報告症例数

調査対象期間内に31件の文献が検索され、それらに計42例の症例が記載されていた。年別では1999, 2000, 2004年に最も多い5件の論文が発表され、それぞれ6例, 7例, 5例の症例が報告された。1995, 2002年には4件, 1996, 2001, 2003には2件, 1997, 1998年には1件の文献が検索された(図17)。

##### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、10歳未満の患者が少なく、10～14歳と50歳代に多くの患者がみられた。最年少は、砂場の砂を食べる異味症の1歳5ヵ月児、最年長は85歳であった。男女比は17:25で女性患者がやや多かった(図18)。

##### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では、42例中26例が視力低下・霧視を訴えた。次いで発熱・悪寒が7例、腹痛が3例であった。すなわち、報告例の中では、眼移行型が多くみられた。初診時の主な所見では、眼移行型の症例では、硝子体・出血が13例、網膜の隆起性病変が11例、乳頭浮腫が5例などであった。一方、内臓移行型の症例では、好酸球増多が14例で最も多く、全身倦怠感が4例、肝腫大が3例であった(表16)。

##### エ) 診断に要した主な検査

トキソカラ関連抗原に対する抗体検査が30例で実施され、眼底検査が23例で行われ、好酸球数が18例で算定されていた。

##### オ) 病原体

病原体が判明した34例中、29例はイヌ

回虫であり、ネコ回虫は1例であった。4例はトキソカラと記載されていた(表17)。

##### カ) 治療

ステロイド投与、眼科的手術、抗寄生虫薬投与が行われていた。ステロイドの投与は内服のみでなく、静注(パルス療法も含む)、眼注も行われていた(表17)。フォスカネットの眼注、アシクロビルの静注が行われた症例も各1例あった。

##### キ) 動物飼育歴ないし接触歴

多くの例では記載がなく、不明例も4例あった。記載があった報告によれば、イヌ飼育歴があった例は8例、イヌとの接触歴、ネコ飼育歴があった例がそれぞれ3例であった(表17)。

##### ク) 感染機会

動物飼育や動物との接触以外の感染機会としては、牛肝生食が9例、獣肉生食が4例、異味症が1例であった(表17)。

##### ケ) 発生上の特徴

患者報告地は、東京都が8例、大阪府が5例、広島県、兵庫県、栃木県が各4例、石川県が3例であり、2県から2例ずつ、10県から1例ずつの症例報告があった。北海道から九州までの各地から症例の報告があり、特定の地域に偏ってはいなかった。

#### 4-8. パスツレラ症

##### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004年の間に、合計30件の文献が検索され、計45例の症例が記載されていた。年別では、1998年を除いて毎年1件以上の論文発表があったが、2003年には論文10編、症例12例と最多であった(図19)。

##### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、15歳未満には患者が少なく、成人年齢の患者が多く、60歳代の患者が最多であった。最年少患者は生後11ヵ月の乳児で、最高齢は78歳であ

った。男女比は 16 : 29 で女性に多かった (図 20)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では、発赤・腫脹，発熱が各 12 例で最も多く，腫脹・疼痛，腫脹，発赤・腫脹・疼痛，発赤・疼痛がそれぞれ 5 例，4 例，3 例，1 例と受傷部位の訴えが多かった。初診時の主な所見としては，発赤・腫脹が 13 例と最多で，発熱が 10 例，排膿が 9 例と続いた。他に紅斑，腫脹，膿疱，潰瘍などが合計 17 例みられた (表 18)。

#### エ) 診断と主な検査

45 例全例で細菌培養がなされており，他にレントゲン検査，CT 検査，超音波検査などが必要に応じて実施されていた。診断は，蜂窩織炎が 21 例で最多であったが，敗血症，扁桃炎，気管支炎が各 4 例，骨髄炎が 2 例，関節炎，肝膿瘍も各 1 例みられた (表 18)。

#### カ) 病原体

34 例中 33 例で *Pasteurella multocida* が分離されたが，1 例では *Pasteurella canis* が検出された。*Pasteurella canis* が分離された例の診断は蜂窩織炎であった。

#### キ) 治療及び予後

1 例を除いて，様々な抗菌薬が投与されており，投与抗菌薬に一定の傾向はみられなかった。壊死性筋膜炎を起こした症例では植皮が行われていた。予後では，45 例中 39 例は後遺症なく回復していたが，皮膚欠損，瘻孔，関節の運動制限などを遺した例が各 1 例，再発した例，持続感染を来した例が各 1 例あった (表 19)。

#### ク) 感染機会，感染経路

感染機会としては，飼いネコからの受傷が 22 例と最も多く，その他のネコが 7 例，飼いイヌが 6 例，その他のイヌが 1 例であったが，感染機会が不明の例も 10 例あった。感染経路としては，咬傷が 20 例と最多で，引っ掻き傷，爪刺傷がそれぞれ 7 例，

1 例であった。また，口移しによる感染，飛沫感染と考えられる例が各 2 例あった。感染経路不明例は 14 例であった (表 19)。

#### ク) 発生上の特徴

患者報告地は東京都が 14 例で全体の約 3 割を占めたが，東京都以外は少数例が広い地域から報告されていた (表 18)。

### 4-9. ライム病

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に 26 件の文献が検索され，34 例の症例が報告されていた。年別では 2003 年に 7 件の論文が，1997 年には 4 件，1998，2001 年に各 3 件の論文発表された。1998 年と 2003 年には 8 症例，2001 年に 5 症例，1997 年に 4 症例が報告された (図 21)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では，15 歳未満は 2 例に過ぎず，多くの患者 20 歳以上であり，特に 60 歳代が多かった。男女比は 19 : 15 でわずかに男子が多かったが，20 ~ 30 歳代では 9 : 1 で男子が多く，40 ~ 60 歳代では 10 : 12 で大差がなかった (図 22)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では，咬刺部以外の部位の紅斑が 16 例，咬刺部の紅斑が 9 例，その他の皮疹が 4 例，発熱が 6 例，顔面神経麻痺が 3 例，感覚異常が 2 例みられた。初診時の主要症状では咬刺部の紅斑が 9 例，その他の部位の環状紅斑，浮腫状紅斑，遊走性紅斑などの紅斑が 19 例であった。紅斑以外には発熱・頭痛，リンパ節腫脹，関節痛が各 4 例，感覚異常，顔面神経麻痺が各 3 例に，脱力，疼痛・筋肉痛が各 2 例にみられ，難聴，髄膜炎も各 1 例にみられた (表 20)。

#### エ) 病原体

特定できた病原体としては，*Borrelia garinii* が 8 例で最も多く，*B. burgdorferi* が 4 例，*B. japonica*，*B. afzelii* が各 1 例であった (表 21)。

#### わ) 診断, 治療, 予後

33 例がライム病と, 1 例が神経ボレリア症と診断されていた。治療としては, 34 例中 33 例で抗菌薬が投与されており, ミノサイクリンが 18 例と最も多く, テトラサイクリン, ドキシサイクリンが各 3 例, AMPC などペニシリン系抗菌薬が 9 例であった (表 21)。32 例は後遺症なく回復したが, 1 例が再発し, 2 例は予後不明であった。

#### か) 感染経路

ダニによる咬刺傷が明らかであった例は 27 例で, 残り 7 例は不明であった。ダニの除去に関して記載がみられた 18 例中, 11 例は自己ないし知人が除去していた。医療機関で除去した例は 7 例で, うち 4 例は刺し口周囲の皮膚切除も受けていた。

#### き) 感染機会

記載があった 24 例中, 流行地を散策中に感染したと考えられる例が 7 例, 登山中が 3 例, 山菜採りや草取り中が 5 例, キャンプが 2 例, ゴルフ中, 山林で, 自衛隊の演習中が各 1 例あり, 感染機会が思い当たらない例が 4 例あった。

#### く) 発生上の特徴

患者の報告は北海道が 19 例と過半数を占め, 長野県が 7 例, 群馬県が 3 例と続いた (表 21)。

### 4-10. オウム病

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995 ~ 2004 年の間に, 25 件の文献と 37 例の症例が検索された。年別では 1999 年を除いて毎年 1 ~ 4 件の文献と 2 ~ 6 例の症例が報告された (図 23)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

年齢が記載された 36 症例の年齢分布では, 30 歳未満の患者は少なく, 30 歳以上で患者が増加し, 特に 50 歳代の患者が多かった。最年少は 9 歳, 最高齢は 88 歳で

あった。男女比は 18 : 19 でほぼ同数であった (図 24)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては, 発熱を 37 例中 35 例が訴えて最多であり, 咳嗽を 19 例, 全身倦怠感を 7 例, 呼吸困難を 5 例が訴えた。初診時の主な症状としては, 発熱が 34 例, 胸部レントゲンでの肺炎像が 30 例, 胸部ラ音が 15 例, 呼吸困難, 低酸素血症が各 3 例, 見当識障害が 2 例にみられた (表 22)。

#### エ) 診断に要した主な検査

診断に用いた検査法としては, CF 抗体測定が 25 例, IgG 抗体, IgA 抗体, IgM 抗体などを測定した例が 16 例であった (表 22)。

#### オ) 治療及び予後

37 例中 36 例に抗菌薬が投与されていた。用いられた抗菌薬は, ミノサイクリン単独が 20 例と最多で, ミノサイクリンと他剤との併用が 4 例, 他剤からミノサイクリンに変更した例が 2 例あった。また, クラリスロマイシン単独ないし他剤との併用が 5 例, 他剤からクラリスロマイシンへの変更が 1 例, エリスロマイシン単独ないし併用が 3 例, ドキシサイクリンが 1 例であった (表 23)。37 例全例が後遺症なく回復していたが, 呼吸管理を受けた例が 4 例, ステロイドパルス治療を受けた例が 3 例あった (表 23)。

#### カ) 感染機会

インコを飼育していた者が 22 名, ハト飼育者が 2 名いた。他にペット店の従業員が 4 例, 野生のハトとの接触が 2 例, 他家のインコとの接触が 1 例あり, ハト小屋を掃除したとき, サファリーパークを訪れた際に感染の機会があったと考えられた例が 1 例ずつあった。一方, トリとの接触がなかった者, 動物飼育歴のない者が各 2 名いた (表 23)。

#### キ) 発生上の特徴

患者報告地は、岡山県が5例、滋賀県、大阪府、東京都が各4例、愛媛県、岩手県、福島県が各3例で、関東以南からの報告が多かった（表24）。

#### 4-11. クリプトコッカス症

##### ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に22件の文献が検索され、22例の症例が収集された。年別では1998年に最も多く、7件の文献が発表され、7症例が報告された。次いで、2003年に4文献、4症例、2001年に3文献、3症例が、1997、1999年には2文献、2症例、1995、1996、2000、2002年に1文献、1症例が報告されたが、2004年は報告がなかった（図25）。

##### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では男女とも60歳代が最も多かった。最年少は16歳のHUS患者、最高齢は78歳のATL患者であった。男女比は12:10で、男女差はなかった（図26）。

##### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は、発熱が22例中8例、頭痛が5例と比較的多かったが、皮疹や咳嗽をはじめ、痙攣、視力障害、構音障害など様々であった。初診時の主要症状では、発疹・丘疹、紅斑、皮膚潰瘍、皮下結節などの皮膚症状が合計10例、髄膜炎と項部硬直が4例、意識障害3例などがみられた（表25）。

##### エ) 診断に要した主な検査

診断に用いた検査法としては、抗原検査が8例、墨汁法、生検・組織検査が各4例、培養が3例、抗体測定が2例あり、胸部CT検査を行った例が5例あった（表26）。

##### オ) 基礎疾患

報告された症例22例中21例に基礎疾患が認められた。基礎疾患としては、ATLが5例、HIV感染が4例、SLE、結核がそれぞれ2例などであった（表25）。

##### カ) 治療及び予後

使用された抗真菌剤では、フルコナゾールが16例、アンフォテリシンBが11例、フルシトシン4例、イトラコナゾール3例、ミコナゾール2例であった（表26）。予後の記載があった20例のうち、改善が9例、治療中が3例、死亡が8例であった（表26）。

#### 4-12. Q熱

##### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004年までに、18件の文献が検索され、30症例が記載されていた。年別では、1999、2002、2003年に各3件の文献が発表され、症例はそれぞれ3例、4例、10例が記載されていた。また2004年には2件の文献に6症例が報告されていた（図27）。

##### イ) 患者の男女別年齢分布

年齢分布では、60歳以上が9例、30歳代が7例で、他の年代より多かった。最年少は5歳、最高齢患者は87歳であった。男女比は、全体では12:10で差がなかったが、14歳以下では7:1と男子に多く、15歳以上では6:16と女子に多かった（図28）。

##### ウ) 主訴及び初診時の所見

記載があった24例での主訴は、発熱が20例で最も多く、倦怠・疲労感が11例、咳・痰が8例であった。初診時の主な症状としては、記載があった23例中発熱が15例、咳・痰が8例、リンパ節腫脹、脾腫、全身倦怠感が各3例あり、2例で髄膜炎がみられた（表27）。

##### エ) 診断に要した主な検査

記載があった25例で用いられた検査法はPCRが19例、IFA、EIAなどによるIgG・IgM抗体の測定が20例であった（表27）。

##### オ) 治療及び予後

治療に用いられた抗菌薬はミノサイクリン単独が9例で最も多く、ミノサイクリン

と他剤との併用が7例、ミノサイクリンから他剤に変更した例が2例あった。他ではマクロライド類が6例で投与されていた(表28)。予後では30例中28例は後遺症なく回復したが、1例が慢性呼吸不全となし、1例は死亡した(表29)。死亡例はインフルエンザ菌の混合感染ありと記載されていた。

#### か) 動物飼育歴ないし接触歴

動物飼育ないし接触歴があった者が22例あった。内訳は、イヌが10例、ネコが9例、ウシ2例、野鳥1例であった。上記動物の中には、抗体陽性のイヌが3頭、抗体陽性のネコが1匹、PCR陽性のイヌが1頭含まれていた(表28)。

#### き) 発生上の特徴

患者報告地は静岡県が8例と最も多く、岡山県、宮城県がそれぞれ4例、3例であった(表28)。

### 4-13. 日本紅斑熱

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に17件の文献が検索され、28症例が報告されていた。年別にみると、1997～1998年、2004年には報告例がなかったが、2002年には6件の文献に8症例が記載され、2003年には2件の文献に11症例が報告されていた(図29)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、小児例が4例、20代、30歳代の患者が1例ずついたが、他は45歳以上で、70歳以上の患者が最も多かった。最年少は2歳、最高齢は82歳であった(図30)。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では、発熱が28例中26例、発疹が13例、全身倦怠感が8例あったが、紅斑は3例にすぎなかった。呼吸困難、意識障害、痙攣を起こした者が各2例いた(表30)。初診時の主な症状では、発熱が24例

で最多であったが、紅斑、発疹がそれぞれ15例、11例と続いた。ダニの刺し口が8例で認められ、意識障害を来した者が5例あった(表30)。

#### エ) 診断に要した主な検査

記載があった18症例のうち、IgG・IgM抗体を測定した例が16例、ワイル・フェリックス反応実施が4例、PCR実施が2例、内容異父名の抗体測定が2例あった(表31)。

#### オ) 治療及び予後

治療薬としては、28例中26例でミノサイクリンが投与されていた。ただし、うち3例は肝障害のために、レボフロキサシンに変更されていた(表31)。28例中26例は後遺症なく回復した。ただし、7例はDICを合併し、2例は脳症・脳炎を、1例が間質性肺炎を合併した。記憶障害を遺した者が1例、死亡者が1名あった(表31)。

#### カ) 感染機会

農作業や草刈りの際に感染したと考えられた例が8例、登山、狩猟、栗拾いなどのために山中に入った際の感染と思われる例が11例あった。また、野外活動、ゲートボール、墓掃除の際の感染と思われる例も計4例みられた(表32)。

#### キ) 発生上の特徴

患者報告地は京都府が9例で最も多く、兵庫県淡路島、島根県がそれぞれ5例、4例であった。静岡県、千葉県からも1例ずつの報告があった。

### 4-14. エキノコックス症

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004年の間に15件の文献が検索され、26症例が報告されていた。1996年と2001年には報告件数がゼロであったが、2004年には4件の文献に12例の症例が記載されていた。その他の年には1～2件の文献があり、1～5例の報告があった(図31)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、感染から発症までの期間が長いためか、最年少が32歳、最高齢が87歳であり、70歳以上の患者が最も多かった。男女比は12:14でほとんど差がなかった(図32)

#### ロ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては肝内腫瘍ないし結節、無症状が各6例と多いが、これらは健診や他の疾患で医療機関を受診した際に異常を発見されたものと思われる。自覚的な症状としては、皮下腫瘍が3例、全身の掻痒感、黄疸、背部の鈍痛、胸部不快感ないし圧迫感、腹痛が各2例であった。初診時の主な症状では、肝内腫瘍ないし結節が26例中16例と最多で、肝内嚢胞が6例、黄疸が2例であった(表33)。

#### エ) 診断に要した主な検査

用いられた検査法としては腹部CT検査が26例中25例で最も多く、肝生検3例、シンチグラム2例であった。また16例でELISA抗体測定が、7例でWestern-Blot法による血清検査がなされていた(表33)。

#### オ) 治療及び予後

治療として肝切除を受けた例が20例、アレベンダゾール投与を受けた者が8例あった。肝外の病変摘除を受けた患者が3例あった。予後の記載があった19例中、寛解生存している例が15例と最も多かったが、2例の死亡例があった(表34)。

#### キ) 感染機会

26例中22例で、感染機会が不明であった。汚染された湧き水や川の水から感染したと考えられた例が2例ずつあった(表34)。

#### ク) 発生上の特徴

患者報告地は北海道のみであり、道外からの患者報告はなかった。

### 4-15. レプトスピラ症

#### 7) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に15件の報告文献が検索され、18症例が記載されていた。1995年と1999年には報告文献がなく、その他の年には1~3件の文献があった。症例数は1998年に5例報告されたが、その他の年は3例以下であった(図33)。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、14歳の患者が1例、27歳が2例いたが、他の患者は45歳以上であった。男女比は17:1で圧倒的に男性が多かった(図34)。

#### ロ) 主訴及び初診時の所見

主訴は発熱が18例中13例で最多であり、続いて黄疸が7例、倦怠感が6例であった。初診時の症状では、腎障害、黄疸をみた例がそれぞれ14例、13例と多く、意識障害、肝障害を来した例も2例ずつみられた(表35)。

#### エ) 診断に要した主な検査

病原体検査としては、抗体検査が18例で最も多く、培養が3例、PCRが2例、尿の検鏡が1例であった(表36)。

#### オ) 病原体

原因菌が*Leptospira icterohaemolagiae*と同等された例が4例、*L. copenhageni*が3例、*L. kirschneri*と*L. hebdomadis*が各1例であり、レプトスピラだが血清型が確定されなかった例が2例であった(表37)。

#### カ) 診断名、治療、予後

14名がウイルス病と診断された。他にレプトスピラ症との診断が2例、あきやみAとBが各1例であった。治療としては、抗菌薬が17例で投与されたほか、血液濾過が4例、血液透析3例、血漿交換が1例で行われた。18例中15例は回復したが、3例が死亡した(表36)。

#### キ) 感染機会

ネズミと接触した者が8例、汚染した井戸水から感染したと考えられた例が1例あ

った（表 37）。

#### ク) 発生上の特徴

患者報告地は東京都が 8 例、大阪府が 3 例と過半数を占め、都市部での発生が多い傾向があった。患者の職業は農業が 4 名であったが、調理師や飲食店員などネズミが出没する環境で働く者が 8 名いた（表 35, 37）。

### 4-16. 肝蛭症

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

1995～2004 年までに肝蛭症の文献は 12 件検索され、合計 22 例の症例が報告されていた。年度別では 1996 年に 4 件の文献が刊行され、13 症例が報告されたが、1999、2000、2003、2004 年は報告文献数がゼロであり、その他の年も文献数は 1～2 件、報告症例数は 1～3 例と少なかった（図 35）。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

報告された症例の年齢分布では 16 歳の女子例を除いて、すべて中高齢者であり、70 歳以上の患者が最も多く、最高齢者は 81 歳であった。男女比は 9：13 でやや女性患者が多かった（図 36）。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

上腹部痛と心窩部痛が 22 例中 13 例と最も多く、発熱が 6 例でこれに次いだ（表 37）。初診時の主な所見では、好酸球増多が 14 件と最多で、CT 検査で肝臓に嚢胞、腫瘍、膿瘍などが認められた例が 12 例あった（表 38）。

#### エ) 診断に要した主な検査

肝蛭症の診断は Oucherlony 法による血清診断が 14 例（陽性 13 例、陰性 1 例）で実施されていた。診断が困難で開腹手術を受けた例、胆管癌を否定できずに肝切除を受けた例が 1 例ずつあった。また、生検などの組織診断を受けた例が 4 例あった（表 39）。

#### オ) 病原体

肝蛭の虫体ないし虫卵が検出できた例は 6 例で、ERCP で虫体を確認できた例、十二指腸液中、胆汁中に虫卵を検出できた例が 2 例ずつあった（表 40）。

#### カ) 治療及び予後

治療に用いて薬剤としては、プラジカンテル単独が 10 例、ビチオノール単独が 2 例、上記 2 剤の併用例が 2 例であった。他にプラジカンテルからビチオノールに変更した例が 1 例、プラジカンテルが無効でトリクラベンダゾールを投与した例が 1 例あった（表 39）。予後では、改善した患者が 12 例、改善不十分例が 1 例あったが、その他の 9 例では記載がなかった（表 40）。

#### キ) 感染機会

感染機会が判明した 15 例中、牛糞を肥料に使用していた者が 8 例と最も多く、ウシ飼育者が 3 例、ウシ肝生食が 2 例、ミョウガ生食が 2 例であった（表 40）。

#### ク) 発生上の特徴

患者の多くは農業、酪農業関係者であった。

### 4-17. E 型肝炎

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

E 型肝炎患者の症例報告文献数は 10 年間で 11 件、報告患者数は 30 例検索できた。報告年は 1997 年に 1 件、1 症例あったが、その後しばらく報告がなく、2002 年から 2004 年は続けて報告があった。特に、2003 年には文献数 6 件、報告症例数 23 例と集中的な報告がみられた（図 37）。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

報告された患者の年齢分布では 50 歳代が 11 例で全体の 1/3 以上を占め、若年者に患者が少なく、中高年者の患者が多く診られた。患者の男女比は 22：8 で、男性が女性の約 2.8 倍多かった（図 38）。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では倦怠感が最も多く 30 例中 23 例

が訴えた。次いで食欲不振が 16 例，黄疸が 10 例であった（表 41）。初診時の主要所見では黄疸が 12 例で最多であった（表 41）。

#### エ) 診断に要した主な検査

E 型肝炎の診断には IgM 抗体測定とウイルス RNA の証明がそれぞれ 8 例，4 例で用いられていた（表 42）。

#### カ) 治療及び予後

劇症肝炎の経過をとった例が 2 例，重症化した例が 2 例報告されていた。予後が記載されていなかった 3 例を除いて，24 例が回復ないし改善したが，死亡例が 3 例あった（表 42）。

#### キ) 感染機会

E 型肝炎の感染機会としては，動物の内臓節食歴のあった患者が 10 例あった。海外渡航歴のあった患者が 3 例いたが，渡航先は欧米であり，渡航先での感染は考えにくかった（表 43）。

#### ク) 発生上の特徴

報告された症例 30 例中 18 例が北海道で発生しており，全症例の 6 割を占めた（表 43）。

### 4-18. 真菌症

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

真菌症の報告文献数は 10 年間で 10 件，報告患者数は 18 例検索できた。基礎疾患の悪化に伴って合併した真菌症は極力除外したため，報告件数が少なくなった。報告は 1999 年に 1 件，2001～2003 年に 3 件ずつあったが，報告症例数は 2003 年が 8 例と最も多かった（図 39）。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

真菌症患者は幼児にも中高年にもみられた。男女比は 8：10 でほとんど差がなかった（図 40）。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は，紅斑，皮疹，脱毛などが多く，

初診時の主要所見としても，紅斑が最も多かった（表 44）。

#### エ) 診断に要した主な検査

真菌症の診断には，真菌の培養，検鏡が用いられていたが，PCR を実施した例も 1 例あった（表 45）。診断名では白癬が 10 例と最多で，頭部白癬が重症化したケルスス禿瘡も 3 例報告されていた（表 45）

#### カ) 病原体

病原体としては，*Microsporium canis* が 6 例で全体の 1/3 を占めた。*Trichophyton mentagrophytes* が 4 例でこれに次いだ（表 46）。ケルスス禿瘡の 3 例のうちネコから感染した 2 例の病原体は *M. canis* であったが，モルモットから感染した 1 例の病原体は *T. mentagrophytes* であった。

#### キ) 治療及び予後

重症例を含めて 7 例で抗真菌薬の外用に加えて，イトラコナゾールの内服が併用されていた。フルコナゾール，グリセオフルビン，テルビナフィンを内服した症例も少数みられた（表 45）。半数以上で後遺症無く回復していたが，脱毛斑，脱色素斑，色素沈着を残した例もあった（表 46）。

#### ク) 感染源

ネコからの感染者が 7 例と最多で，家族内感染も 3 例みられた（表 46）。

### 4-19. ジアルジア症（ランブル鞭毛虫症）

#### ア) 年別文献数及び報告症例数

2002 年に 2 件，1997，2000，2003 年に各 1 件，合計 5 件の文献が検索され，これらに 1 例ずつ，合計 5 例の症例が記載されていた。

#### イ) 患者の男女別年齢分布

年齢分布では，10 歳代後半，40，50，60，70 歳代が各 1 例で，男女比は 2：3 であった。

#### ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は下痢が 3 例で，1 例は糖尿病性末梢神経障害のために，他の 1 例は大腸ポリ



ープの経過観察のため受診した際に発見された。

エ) 治療及び予後

全例にニトロメダゾールが投与され、後遺症なく回復した。

カ) 病原体

1例は便から、1例は腸液から *Giardia lamblia* が検出されたが、2例は腸粘膜の生検で、他の1例はERPCで脾臓に *Giardia lamblia* が証明された。

ク) 感染機会

5例とも感染源も感染経路も不明であったが、1例では性媒介感染が疑われた。

#### 4-20. クリプトスポリジウム症

ア) 年別文献数及び報告症例数

2002年に2件、1998、2004年に各1件の文献が検索され、合計6例の症例が記載されていた。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢は10歳代後半と30歳代が1例、20歳代が4例であり、全例が男性であった。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は水様下痢が6例、腹痛、食欲不振が各2例であった。主要症状は水様下痢（6例）と腹部圧痛（3例）であった。

エ) 診断に要した主な検査

4例は便から *Cryptosporidium parvum* のオーシストが検出され、1例は大腸内視鏡検査で、他の1例は便中抗原検査で診断がなされた。

カ) 治療及び予後

全例で補液がなされ、2例で止痢剤、1例でクラリスロマイシンが投与されていた。

ク) 感染源

2例は汚染された水道水が感染源であったが、他の4例では感染源が不明であった。

#### 4-21. 日本脳炎

ア) 年別文献数及び報告症例数

1998、1999、2000、2001年に各1例の文献が検索され、それぞれ1症例、計4症例が記載されていた。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢は9歳未満、40、50、60歳代が各1例であった。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は発熱、意識障害、痙攣、四肢の鈍麻であり、初診時の主な症状では項部硬直、意識障害であった。

エ) 診断に要した主な検査と予後

HI抗体検査で診断された。死亡例はなかったが、3例で後遺症がみられた。

カ) 感染機会

感染源、感染経路は全例で不明であった。

#### 4-22. 炭疽、鼠咬症、ブルセラ症

ア) 炭疽

1995年と2002年に炭疽の文献が各1件検索され、計2例の症例が記載されていた。症例は2例とも60歳代の男性で、1例の主訴は頭部の痂皮と痒み、他の1例は前彎の腫脹、発熱、頭痛であった。2例とも皮膚炭疽と診断され、後遺症なく回復した。

イ) 鼠咬症

2001年に1件の文献があり、50歳代の男性症例が報告されていた。主訴は鼻出血、初診時には皮下出血、血小板減少、蛋白尿、尿潜血がみられた。抗菌剤投与と血漿交換による治療を受けたが、救命できなかった。病原体は *Streptobacillus moniliformis* であった。

ウ) ブルセラ症

1996年に海外渡航歴のない国内発生例1症例が報告された。患者は30歳代の外科医で、主訴は微熱、乾性咳嗽、胸痛であった。PCR、肺組織培養で *Brucella abortus* によるブルセラ症と診断された。ドキシサ

イクリン，ストレプトマイシン，リファンピシンの併用により回復した。感染経路は不明であった。

5. 文献検索で把握できた症例数と発生動向調査による届出例数との比較。

感染症法に基づいて 1999 年から全例報告がなされている疾患と今回文献検索の対象とした疾患の間で共通している 12 疾患について、2000 ～ 2004 年に把握された患者数を比較した。炭疽が届出数はゼロ件であったものの、文献上では 1 例検索できた。しかし、炭疽以外の疾患ではすべて届出患者数が文献上記載された症例数をはるかに上回っており、文献上の症例数は、届出患者数が多い疾患では届出数の 1 % 前後、届出患者数が少ない疾患でも 30 % 前後しか把握できていなかった（表 47）。

#### D. 考察

発生動向が十分には知られていない動物由来感染症のわが国における発生状況を知る目的で、動物由来感染症症例報告文献を検索して検出できた症例について年別報告文献数、症例数、男女別患者年齢分布、患者の主訴、初診時の主要症状、検査法、治療、病原体、予後、感染機会、動物飼育歴、食物嗜好などを分析した。

検査法、病原体、治療法などはこれまで成書に記載された内容と大差のない結果であったが、患者の年齢分布、男女比、感染機会、発生地などに関しては、猫ひっかき病、パストツレラ症、トキソプラズマ症では女性患者が多く、E 型肝炎、レプトスピラ症では男性患者が圧倒的に多いこと、猫ひっかき病では従来言われているより中高年の患者が多いこと、猫ひっかき病の発生が北海道、東北、北陸地方に少ないこと、先天性トキソプラズマ症患者の中に母親が妊娠中に獣肉を生食したことが感染源と考え

られる例があったことなど、新しい情報を得ることができた。

文献のデータベースを利用して動物由来感染症の発生動向を知るという手法には、学術誌に掲載される症例は、発生した全症例の一部にすぎないため、全症例の一部しか把握できないという重大な欠陥はある。しかし、その時々注目された疾患ないしきわめてまれな疾患は症例報告として記録されていると考えられるので、個々の症例報告を検討することにより、特定の動物由来感染症が国内のどの地域で多発するか、一般的なあるいはまれな感染経路はどのようなものか、確定診断するうえで何が有用な検査法であるかなど、通常発生動向調査では得られない情報をも入手することが可能である。

感染症法が改正されて、届出対象となる動物由来感染症の種類は増えつつある。しかし、猫ひっかき病、パストツレラ症、トキソカラ症など未だ届出の対象となっていない動物由来感染症に関しては文献検索の手法による以外に発生状況を知る手段がない。また、届出対象の疾患であっても、患者数や発生地域は把握できるものの、診断法や治療法に関してはまったく情報が得られない。したがって、動物由来感染症症例の詳細を知る手段として、文献検索による手法は今後もその意義を失うことはないと考えられる。

今後は文献検索によって得られた症例報告の分析結果を、症例報告本体とともに CD-ROM に収載して、第一線の医療機関に配布し、動物由来感染症診療に資する予定である。

#### E. 結論

文献のデータベースを利用して動物由来感染症の発生動向を知るという手法には、欠陥はあるものの、通常発生動向調査で

は得られない情報，つまり感染経路，診断法などに関する情報も入手することが可能であり，こうした情報を集積・分析することにより国内における動物由来感染症の実態を明らかにするとともに，さらには動物由来感染症の診断を容易にする手段を提供できる。

F. 健康危険情報

特記すべきものなし。

G. 研究発表

未発表

H. 知的財産権の出願・登録状況

予定なし。

表 1. 三次調査で検出された疾患別文献数

| 感染症         | 件数  | 感染症           | 件数 |
|-------------|-----|---------------|----|
| 猫ひっかき病      | 64  | 発疹熱           | 0  |
| つつが虫病       | 41  | Bウイルス感染症      | 0  |
| エルシニア症      | 38  | サル痘           | 0  |
| 糞線虫症        | 35  | ペスト           | 0  |
| リステリア症      | 34  | 腎症候性出血熱       | 0  |
| トキソプラズマ症    | 32  | 狂犬病           | 0  |
| トキソカラ症      | 31  | 狂犬病関連リッサウイルス症 | 0  |
| パスツレラ症      | 30  | リンパ球性脈絡髄膜炎    | 0  |
| ライム病        | 26  | トリパノソーマ症      | 0  |
| オウム病        | 25  | 発疹チフス         | 0  |
| クリプトコッカス症   | 22  | 回帰熱           | 0  |
| Q熱          | 18  | 野兔病           | 0  |
| 日本紅斑熱       | 17  | 類丹毒           | 0  |
| エキノコックス症    | 15  | アライグマ回虫症      | 0  |
| レプトスピラ症     | 15  |               |    |
| 肝蛭症         | 12  |               |    |
| E型肝炎        | 11  |               |    |
| 真菌症         | 10  |               |    |
| ジアルジア症      | 5   |               |    |
| 日本脳炎        | 4   |               |    |
| クリプトスポリジウム症 | 4   |               |    |
| 炭疽          | 2   |               |    |
| 鼠咬症         | 1   |               |    |
| ブルセラ症       | 1   |               |    |
| 合計          | 493 |               |    |